おちほ

第89号 平成29年11月20日 発行 社会福祉法人 椎の木会 **落穂寮** 発行者 太田正則
TEL 0748－77－2299 FAX 0748－77－5588 http://ochiho.noor.jp/

地蔵盆

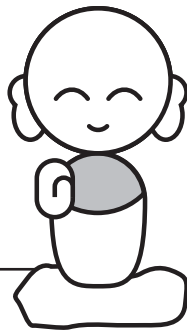
今年も毎年恒例である地蔵盆を行いました。

グラウンドからいつも生活棟を眺め、利用者さんを見守って下さるお地蔵様。そんなお地蔵様へ感謝の気持ちを込めながらお身体を洗い・お化粧をして…と担当職員が準備を行います。

綺麗にお色直しをされたお地蔵様に一年間の感謝を込めると共に今年も無病息災で過ごせるように一人ひとり手を合わせてお地蔵様にお参りをしました。

中には我先に！とお地蔵様の前へ自ら行かれ手を合わせ始める利用者さんもおられました。もしかするとその利用者さんは、今年一人の利用者さんが亡くなられた事もあり、守り神でもあるお地蔵様に天国の彼を守ってもらう事、今を生きている自分たちを守ってもらう事を願われたのかもしれません。

これからの一年間もみんなが元気に過ごせますように・・・



お残しは許しまへんで！

理事長　山下陽一

三〇・一〇（サーティ・テン）運動

少し前のことですが、京都に所用で山科から地下鉄に乗りました。つり革にぶら下がっていると、吊り広告が視野に入ってきます。あの吊り広告は、心理学的に視野に入るようにうまく配置されているようで、意識しないままに広告文字が目に飛び込んできます。注視するつもりもないのに見せられています。その広告が見出しの『三〇・一〇（サーティ・テン）運動』の大文字です。いったいこれはなんの広告だろう？視線が自然にメッセージへと流れそれを読むと、「宴席での乾杯後三〇分は料理を楽しみ、宴会終了前一〇分間は自分の席に戻って再度料理を楽しみましょう」という内容が書いてありました。宴会参加者にとってはずいぶんお節介な内容です。そして広告の隅っこにこの広告のスポンサーが小さく載っています。なんと「京都市環境政策局」！

京都市は観光都市。夜ごと酒宴も数多く催されることでしょう。市としては開かれるだけたくさんの税収があるのでしょうが、それに伴って排出される残飯・ゴミの処理問題は大きな政策課題になっているのかもしれません。残飯処理問題は食事マナーの問題ではなく、環境問題となっているのです。

給食を食べ残す

神奈川県大磯の中学校の給食の食べ残しを調べたところ、「残食率」が二十六％に達していたそうです。それも白飯や野菜を残す傾向がありました。（朝日新聞デジタル9・16）給食として出されたものの「味が薄い」とか「冷たい」という理由ですが、提供されたものの四分の一が残飯として捨てられている、というわけです。

私が今の仕事に就く以前ある施設を見学したとき、昼を用意しているので食べていきなさいというお招きをうけて、利用者と一緒に皆さんテーブルに座って食事をしました。何を食べたのか覚えていないのですが、添え物のツマにパセリが付けてありました。何の意識もないままパセリを残していたのです。それを隣に座っていた女の子が、十分聞き取れたわけではないのですが「残したらあかんの」というようなことを言っているのです。すると隣に座っていた保育士が「食べ残しはあかんのよねー」といって、私に気付かせてくれました。それ以来サンドイッチや刺身などのツマとして添えられたパセリは必ず残さずたべることにしています。

お残しは許しまへんでー！

落穂寮の食べ残しについて管理栄養士の橋本さんに尋ねたところ、食品残渣はほぼゼロということです。食欲が安定していない利用者がある中、残飯としてはほとんど出ていないということです。

落穂寮は法律で定められた認可施設ですから厳しい栄養管理が求められており、カロリー計算やタンパク質、リン、カリウムなどの数種の栄養素を給食数でトータルに合算して、基準の範囲内に着地させる必要があります。さらに個人それぞれの健康状態の保持が求められ、諸要素が摂取し難く給食でカバーできない場合などは栄養補助食品などを使って栄養バランスを個人別で取っています。

食べることとその排泄は年齢に無関係で一般の家庭生活も施設での生活も同じで健康維持に欠かすことはできません。健康な食生活を維持しながら、食品残渣が生じないということは需給のバランスが極めて健全に統制されているという証拠なのです。食材の発注や栄養計算は現在ではコンピュータを使って計算していますが、以前の栄養管理は手計算でやっていたのですからまったく敬服です。

最近の人たちは多様で嗜好が偏っている人も珍しくありません。職員の側の給食残渣に心配がないわけではないのですが、残っていないということですから、ひょっとすると、落穂寮に入職して偏食が改善されたのか、あるいは間食その他で胃袋を納得させているのか興味のあるところです。

特定の食品を食べると、下痢をするとか蕁麻疹が出るということもあり、一概に偏食と決めつけられない場合があります。ショートステイの利用者には固執性の強い傾向を持った方たちもおられ、偏食をなんとか改善したいと思っておられる保護者のご苦労を思います。ところが利用する期間ご本人は出した食事はなんとか食べている様子。一汗かくほどの運動でお腹も空きます。好きな間食で胃袋を満たせばよいというわけにはいきません。食堂での食事はわがままがきませんから、決められた時間に気に沿わないものでも出されたもの食べないわけにはいかない。偏食の改善は三食一括で行えるものなのでしょう。これが巧まないで偏食を改善する方法です。

忍術学園の食堂のおばちゃんはいつも生徒たちに言います。

「お残しは許しまへんでー♪」

（二〇一七・一〇・一二）

自力

寮長 太田正則

一九八六年の入職当時、居住棟と食堂や浴室が別棟になっており、更に、それぞれの建物が違う標高に建っているため、移動の度に靴を脱ぎ履きして階段や坂道を上り下りするという快適で便利で優しい生活環境とはかけ離れた不快的な環境が落穂寮の売りであり特徴でした。雨の日は傘をささなければなりませんし、雪が積もると雪かきをして歩道を確保しなければなりません。お風呂に入って温まっても、居住棟に着くまでに湯冷めしてしまうなど、今では考えられない環境でした。しかし、児童施設であった当時、その環境は、生きることそのものが身辺自立訓練であり、機能訓練であり、体力維持増進という、年齢を重ねるにつれて獲得していくことが求められる利用者・職員にとっては、あえてその取り組みに理由付けをする必要がなかったことで、精神的負担は軽減されていたと思います。あれから三十一年が経ち、当時小学生だった利用者も四十路を迎えておられます。

今年七月、利用者が亡くなられました。四十歳の彼は当日の朝には元気に歩行に出ておられたのですが、その日の午後、痙攣発作後に心肺停止となり、天に召されました。重度の知的ハンディを持つということは、日常においてどれだけ健康維持に努めていても、どうしても補えない弱さを持っておられるのではないでしょうか。それは、自ら意識して維持しようとするのではなく、あくまでも第三者が配慮して維持できるように補助しているところではないかと思います。三年ほど前にも同年代の方が亡くなられています。

また、これまで元気に過ごされていた方も四十歳を境に身体機能の低下や生命維持機能の低下が顕著に見られています。自然に考えるとこの四十歳という年齢は、私たちのありのままの暮らしの境目、本来の寿命の最初の岐路なのかもしれません。

さて、創立六十七年を迎えた落穂寮は、石部町東寺に移転して四十七年が経過し、当時の建物の老朽化対応として順次建て替えなどの施設整備を実施してきました。前述の利用者の加齢に伴う身体機能低下に対する、安心安全な生活活動の確保対策として、また、利用者・職員の体や心の負担軽減を考え、エレベーター・渡り廊下・生活道路の舗装などに取り組み、今では同じフロアに食堂や浴室があり、雨風を感じることなく、階段や坂道の上り下りもなく、安心安全を最優先した生活空間での暮らしを提供しています。ただ、自ら意識して心がけることができない方たちにとって、暮らしの中での必要最低限の安心安全な生活、職員にとって心身ともに負担の少ない労働環境は、あえてその時間や場所を設定して訓練等に取り組まなければならない環境が、逆に目に見えないところで利用者の自力を損なうことに繋がっていないことを願います。とはいうものの、このような思いとは裏腹に、現実には四十歳代に入り数人の利用者が歩行困難になられ車椅子等を利用せざるを得ない生活になり、思いだけではどうにもならない現状を目の当たりにしています。特に、入浴支援については、現状のリフトだけでは対応できないため、特殊浴槽等の整備が必要となってきました。この設備は、入所利用者だけではなく、在宅障害者にとっても必要な設備となるため、社会資源の一つとしての施設整備を考えていきたいと思います。

折り合い

私たちは「明日の笑顔につながる支援」をモットーに日々支援を行っていますが、この笑顔を得ることは容易ではありません。ほとんどの利用者が言葉を持たない方なので、真に満足度を図ることができるのはまさに笑顔しかないのです。福祉はその人それぞれの幸せを実現することが目的ですが、幸せは人によって千差万別で、ご本人の幸せがご家族の幸せとは限らないのです。私の想う幸せの形と私の子供が想う幸せの形は違うのです。どこに視点を置くかというと、本来はご本人に視点を置くのですが、その本人を支えるご家族の意向が働きます。支援者として関わらせていただく中で、何が一番いいのか、折り合いをつけられる着地点を探りながら、誰かが大きく負担することなく、それぞれが少しずつ分け合うことで、皆が笑顔になれる、そんな地域社会を目指しましょう。

（二〇一七．一〇．九）

七夕フェスティバル

今年も毎年恒例の七夕祭りの時期がやってきました。毎年新人職員の腕の見せ所でもある七夕祭りですが、なんと今年は新人ゼロ（泣）

さぁ、どうしましょう。という事で白羽の矢が当たったのが、手話シンガーソングライターのＹＯＫＫＯさん！とてもキュートなＹＯＫＫＯさんの透き通る歌声やダンス、手話を取り入れた振り付けに、利用者さんも体を揺らしたり、手話を一生懸命真似したり、最後は、皆さん前に出てＹＯＫＫＯさんを取り囲んで一緒に踊ったりと、とても盛り上がり、楽しい時間を過ごす事が出来ました。

また来年は、新しい職員と一緒に盛り上がれるといいですね。

納涼祭

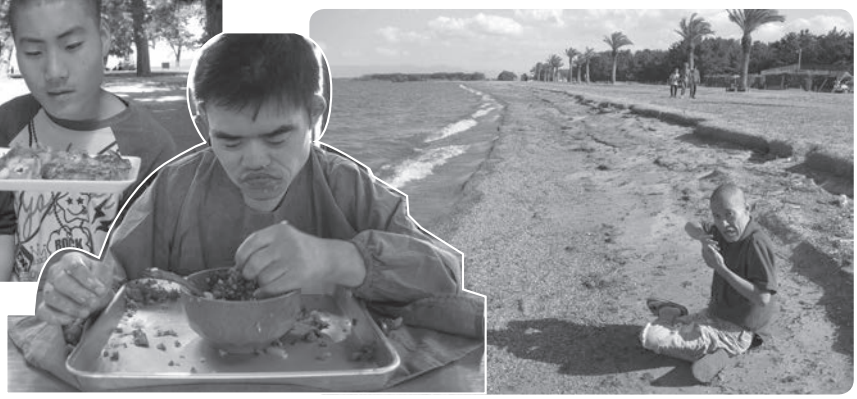
地蔵盆を終え、夕食からは納涼祭。昨年に引き続き今年も多目的学習室で行われました。おにぎり、フランクフルト、ゼリー、ポテトに加え、職員が気合を入れて作った焼きそばが並び、利用者さんの長蛇の列が出来ていました。みなさんここぞとばかりにお代わりされ、いつもとは違う食事を存分に楽しまれていました。

そして夕食が終わると盆踊りです。櫓から流れる江州音頭の音楽に合わせて踊る人、ベンチに座って見ている人、楽しみ方は様々でしたが、みなさんお祭りを満喫されていました。フィナーレは恒例の花火。手持ち花火、打ち上げ花火共に綺麗でみなさん見惚れておられました。

たくさんの笑顔が見られた納涼祭。みなさんお疲れ様でした。

男子棟飯盒炊爨

暑さも落ち着いた九月二十九日に毎年恒例の夏の行事、飯盒炊爨が行われました。今年も去年と同じマイアミ浜オートキャンプ場へ。現地に到着すると利用者さんそれぞれ砂浜で遊んだり、職員と過ごしたりとお肉が焼けるまで自由に過ごされていました。お肉も焼き上がりみなさん一緒に「いただきます！」焼きたてのお肉やソーセージにお野菜あっという間にお皿から無くなっていきます。美味しいご飯に満面の笑顔。みなさんおかわりもたくさんして心もお腹も大満足。来年もおいしいものがたくさん食べられるといいですね！



女子棟飯盒炊爨

今年の女子棟飯盒炊爨は例年より少し早い6月下旬、近江八幡市にある国民休暇村のキャンプ場でBBQを開催しました。

梅雨も中休みとなり雲の隙間から顔を出す青空を味方につけ、バスに乗り込みいざ出発！

現地の広場にはタープも設営されており、日陰の中で快適に過ごすことができました。職員は火起こしに、肉を焼き野菜を切り、焼きそばを炒めたりと、調理に夢中でそれどころではありませんでしたが（笑）。

ある程度食材が焼けてきた頃、お待ちかねの「いただきます」です。お腹も空いていたのか挨拶をして間もなく、「おかわり！」の声が続々と出だし、皆さんの食欲に驚いて調理が追い付かないほどでした。それでも美味しそうにお肉を頬張る利用者さんの笑顔をみることが出来て、それを見守る職員にも自然と笑顔がうつります。今日は特別に（栄養士には内緒ですが…）たくさんおかわりをすることができて、みなさんお腹いっぱい胸いっぱいの大満足の様子でした。「ごちそうさまでした！」

第48回 レクリエーション大会

玉入れ白組

みんなで準備体操

玉入れ紅組

ボールリレー

今年もレクリエーション大会を開催しました。数日前から天気が崩れ、残念ながら当日も雨となってしまいました。利用者の方々の事を考え、グラウンドでの開催を諦め、多目的学習室にて利用者と保護者の方のみの参加でレクリエーション大会の開催になりました。

午前は懇親会。それぞれ保護者の方とお話ししたり、散歩をしたりとゆっくりして過ごされています。

お昼御飯には美味しいお弁当が…。保護者と食べるお弁当は格別でいつもと違う雰囲気のなか食べるお弁当は特別に美味しかったでしょう。

午後からは、利用者、保護者、総勢一〇〇名程でたくさんの人であふれる中、開会式が始まり、レクリエーション大会スタートです！一番初めの競技は玉入れです。今回の玉入れはいつもとは一味違った玉入れです。紅・白組が交互に床に置いてある的・職員が背負うかごに向かって玉を投げ入れ点数を競います。玉入れは紅組の勝利！続きまして2つ目の競技はボールリレー。紅・白組の選抜メンバー10人で保護者の方と協力して隣の人にボールを渡し、ボー

ルが最後の人についたタイムを競います。2つ目の競技も紅組の勝利！最後は職員によるダンス！〝キミに一〇〇パーセント〟〝ぱわわっぷ体操〟の2曲を披露！利用者もノリノリで最後はみんなでぱわわっぷ体操を踊って会場全員が一体となりました。

時間が経つのも早く、あっという間に閉会式。今回は2勝0敗で紅組が優勝しました。

キミに100パーセント♪

紅組おめでとう

今回のレクリエーション大会は天候に恵まれませんでしたが、来年こそ晴天の中開催できるといいですね！

総合教育センター初任者研修

総合教育センター初任者研修として、今年も11名の先生方が研修に来られました。

普段接する方とは年齢こそ違えど、支援しておられることもあり、利用者さんとの打ち解けるスピードの速さや、向き合う姿勢にこちらも学ばせてもらうことが多々あります。

普段の生活の様子を見ていただくことで、先生方が今学校で関わっておられる子どもさん達の将来をリアルに考える良い機会になっているそうです。

私たち支援者は成育歴を知り、今を知ることにも繋がりますが、先生方は子どもさんたちの将来像を想像し、今しておくべきことを考えることができます。そうして学校・福祉施設の一人の子どもさんの人生における「点」が協力することにより「線」になることが、支援を必要とされる方たちにとって生活しやすい環境を整えることに繋がると感じています。

今年も来ていただきありがとうございました。

さようなら恭己さん

去る七月二日、恭己さんが亡くなられました。本人はもちろん、家族の方、職員も全く予想だにしていない突然の出来事でした。お別れには旧職員が何人も駆け付け、改めて多くの人に愛されていた方だったとの思いを強くしました。

よく笑い、よく怒り、少しお節介で、いつも周囲に気を配っていた恭己さん。周りの異常を察知すると、「アーアー！」と声出しと指さしでアピールして、職員に伝えてくれました。それに助けられたのは私ひとりではないはずです。「ありがとう」と伝えた時の「どうや！」と言わんばかりの、あなたの誇らしげな表情が今も思い出されます。たくさんの笑顔と思い出をありがとう。ご冥福をお祈りいたします。

防災倉庫が来た！

自然災害が頻繁に起き、防災に関して色々考えさせられる今の世の中ですが、防災備蓄倉庫を持たない状態であったため、まずは倉庫の購入からという事で今年六月に敷地内の一角に設置しました。被災した際に入所利用者をいかに守るか、また地域の福祉避難場所として非日常の動きにスムーズに適応が難しい方たちに対してどのような支援が必要なのか、今後も継続して防災意識を持ちながら支援を提供していこうと思います。

泉

この頃、「まっとう」という言葉をよく目にするように感じます。

まっとうな政治、まっとうな生活、まっとうな会社、などなど。「言葉」というものは、往々にして社会の状況を反映するものです。数年前から「安心・安全」という言葉が多くの場面で使われるようになりました。以前からこの二つの言葉は当然ありましたが、このようにセットで目にする頻度は少なかったと思います。思い返してみると、二〇一一年に起きた東日本大震災以降に多用されるようになったように思われます。津波による悲惨な被害の光景、起きないとされていた原発事故が起きてしまったこと。それまで安心や安全とされていたものが崩壊した瞬間でした。

一度失ってしまったことがトラウマとなり、この言葉を多用させてしまうのかもしれません。

「まっとう」とは「真っ当」とも書き、「まとも」「真面目」という意味になります。現在の社会を俯瞰して見た時、この言葉が多用されがちなのも仕方がないように思われます。日々伝えられるニュースは嘘や悪事が誤魔化しきれなくなったものばかり、「まっとう」にしていれば起りえない類のものです。福祉の世界も例外ではなく、目や耳を疑いたくなる事件が実際に起きています。それらの事件は目や耳を塞ぐのではなく、検証することで、「他山の石」としていくしかありません。利用者さんの「まっとうな生活」のためには職員が「まっとうな仕事」をしていくしかないのですから。

ご協力ありがとうございます

平成29年９月末現在

社会福祉法人椎の木会及び落穂寮の運営にご協力いただいた方に、この場を借りて御礼申し上げます。

今後も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

〈寄付金〉
シガ技研

〈物品の寄付〉
原田隆和
宇川新蔵

〈寄　贈〉
河本文教福祉振興会
［空気清浄機］

（敬称略）

ありがとうございました。

木言（こと）

ドングリがひとつ
ドングリがふたつ
かぞえきれない数が
毎年一本の木から落ちる
そのうち何個のドングリが
一本の木になれるのか
一本の木には
それだけの価値がある